

**「笹川杯全国大学日本知識大会2017」**

**感 想　文**

****

**期 　日　 ２０１7年１2月9日、10日**

**場　 　所　 上海交通大学**

**主　 催　 公益財団法人日本科学協会　上海交通大学**

**特別協賛　日本財団**

**目　次**

重慶三峡学院　陳資政　………………………………………………………………2

重慶三峡学院李　暁霞　………………………………………………………………2

重慶三峡学院李　思潔　………………………………………………………………2

大連大学　雷景尭　……………………………………………………………………3

大連大学　李嘉嘉　……………………………………………………………………3

大連大学　鐘一棚　……………………………………………………………………4

上海交通大学　王若平 ………………………………………………………………4

　上海交通大学　呉文君 ………………………………………………………………4

上海交通大学 孫亦雲　…………………………………………………………………5

四川外国語大学　黄一倫　……………………………………………………………5

四川外国語大学 劉晔 ………………………………………………………………5

四川外国語大学　李文 …………………………………………………………………6

東華理工大学　童華軍 …………………………………………………………………6

中南財経政法大学 陳馨雷　……………………………………………………………7

天津外国語大学　 周姗姗 …………………………………………………………… 7

華東政法大学　姚子茜 ……………………………………………………………**……**8

華中科技大学 許逸菲**…………………………………………………………**…**…**…8

吉林華橋外国語学院　肖姗夢　…………………………………………………………9

南陽理工学院　鐘子龍　…………………………………………………………………10

**重慶三峡学院　陳資政**（原文中国語）

大会に参加するのは毎回が貴重な体験だと思っています。今回の「笹川杯」もそうです。

まずは、こうした全国各地のみんなと競える機会をくださった、主催者の皆様上海交通大学と日本科学協会そして協賛された日本財団に感謝したいと思います。準備期間が限られていたため、我がチームは最初から明確な役割分担を決め、各人が数分野ずつの日本の知識を担当しました。団体戦では大部分のテーマについて誰かしらは答えられました。しかし個人としては解けない問題も結構ありました。自分が今までに知っている日本の知識が狭すぎるのだと感じます。関心のある分野以外のテーマはほとんど答えられませんでした。今回の団体戦で優勝できたのは二人のチームメイトのおかげです。

また、平常心を保つことも成功には重要だと思います。この大会では回答が他チームに出遅れて得点のチャンスを失う場面が何度もありました。それでも平常心を保って焦らず慌てず、次の得点のチャンスをつかむことに努めたのです。平常心も我がチームを勝利に導いた重要な要素の一つだったと思います。

この大会を通じて日本に関する知識が豊かになり、またチームワークの重要性を理解することもできました。大会こそ終わりましたが、今後も引き続き日本の知識を習得し続け、中国との友好交流に貢献していきます。

（私はコンテストを参加する経験は毎回のも貴重だと思います。今回の「笹川杯」日本知識コンテストを参加する経験もそうだと思います。

まず、私は主催者の日本科学協会と上海交通大学、また賛助者の日本財団を感謝します。全国各地から集まった学生たちと）※()部分は、日本語原文。

**重慶三峡学院　李暁霞**（原文中国語）



光栄にも今回の日本知識クイズ大会で特等賞を獲得できました。この大会では多くのことを学びました。まず、チームワークは絶対に外せません。団体戦で最も必要なのは何でも答えられる神のようなチームメイトではありません。仲良くできて一緒に楽しめ、チームを冷静にできる落ち着いたチームメイトが必要なのです。また、この大会で出されたテーマは学術的専攻分野に関わるものばかりではなく、日本の生活常識に関わるものもありました。最もみごとだったのはやはり中日を結び付けた何問かです。中国人に聞いた最も好きな日本の伝統食物の第一位は何かといったものでした。この問題は中国と日本の絶妙な橋渡しとなっており、こういうものがあると大会の性質も昇華できる点がすばらしいと感じました。そして、この大会に参加した競争者のみんなについて、日本に関する知識の把握レベルは高いと明らかに感じました。おかげでもっと考えもっと知識を蓄えて、またみんなと競争の舞台に立って、また激しく緊張する知識の祭典を楽しみたいと思っています。

**重慶三峡学院　李思潔**（原文中国語）



今回はチームで2017年12月10日に上海での大会に参加しました。実は6月に学内で小規模な選抜が行われています。日本知識クイズ大会の本はその前に読んでいました。この大会に参加できたことは非常に光栄です。

初めて日本語に触れたのはかなり前で、小学5年の頃には『NARUTO -ナルト-』を見るため夕飯も食べずにテレビを付けていました。小さい頃から日本語は響きがいいと感じていました。中学や高校の時もしょっちゅう2本の日本ドラマを見ており、日本語を学びたいと思っていましたが受験のプレッシャーで五十音しか学べませんでした。やっと大学受験を迎え、日本語学科を自ら選んだのです。

講義が始まった頃はとても困惑していました。高校の頃と違って勉強しろと圧力をかけてくる人がいなかったからです。幸い先生方の助けが得られ、また日本の文化に対して興味が出てきたので、1年の後期からは学習に努めようと決め、毎日自習室に籠もっていました。ほとんど毎日、朝7時から夜10時までです。その後、梁先生が上海での大会に参加する学生を選抜したとき、試してみたいと思っていた自分も選抜に合格しました。学習チームに参加してからは、よくいっしょに学んで互いに促しあいました。大会のとき周りを見るとみんな本を手にぶつぶつ言っていましたが、私達はただ真剣に問題を聞き、ステージ上の選手達といっしょに答えていました。遊びのように、自分をテストする気持ちで大会に参加し、最後まで行きました。各コーナーの前には励まし合って戦略を打ち合わせました。

もちろん他大学もすごく、二次予選に入ると5チーム中4チームが勝ち上がるルールで、その時はまだそわそわしていました。他チームが間違えたので守りに入り、回答権を取りに行きませんでした。そうして決勝まで進んだのです。

今回の日本に行って交流し学習できる機会は本当にとても貴重です。引き続き学習に努め、もっとよい成績を収めて、中日関係に尽力したいと思います。

**大連大学 雷景**尭（原文日本語）

時間が経つのは早いものです。上海の寒い冬はまるで昨日の出来事みたいだと思います。笹川杯の参加者と一緒に、みんな楽しいひと時を過ごすことができました。まもなくこの冬が終わりましても、上海にいた三日間は一生も忘れられないでしょう。私は今回大会の参加者として過ごした時間がいとしいと思うのは、笹川杯のおかげで、私はようやく、新しい自分ができたからです。

　一年生のとき、自分はスピーチコンテストに参加したことがあります。けっきょく、緊張のあまり、うまくできなかったです。あの時の私にとっては、大勢いる人たちの前に自分をアピールするなんて、ぜんぜん考えられなかったです。頭の中が真っ白になったことも、手が止まらなく震えたことも、今も鮮明すぎの記憶です。

　せっかくの努力も無駄になってしまい、自分が力不足わけではなく、ただ知らない人たちのまえに緊張しやすくなるわけです。どんなに悔しいでも、その気持ちは誰にも伝えられないもので、毎朝、私は鏡に映る自分の理想像になれない自分が嫌いになって、この人の普通の表情を凝らせないことを悲しんでいました。この人は笑っていても、この人はいつか私のことを好きではなくなるかもしれないと思って、不安は消えないんです。そのまま、私はいつか自分を捨てるかを想像して、傷ついて、そうやって過ごしてきたのでしょう。

　ですから、今回の笹川杯に参加する前、自分が冷静に舞台に上がれば成功で、どんな結果でも納得できると思いました。しかし予選のとき、舞台に立った一瞬間、「緊張してない、とても落ち着いてる」と心からはっきり気づきました。苦戦を経って、決戦に入り、最後パートナーと一緒に団体戦一等賞をもらい、個人戦も優勝賞をもらいました。なぜ今回しか緊張していなかったでしょうか。その理由は私にもよく分かりませんけど、ひとつだけ確信できるのは、今回の笹川杯をきっかけに、私はこれまでなくなった自信を、再び手に入れました。優勝カップが渡されたとき、スポットライトの光りは場内に冴え渡ることは、永遠に胸に刻まれました。

　笹川杯は私を変えてくれました。笹川杯のおかげで、立派な成長ができるようになりました。日本語を学ぶ道に、笹川杯に出会えて何よりもよかったと思います。今回の大会から与えられる勇気と自信を持っている限り、どんな困難をかかわらず、乗り越えられることを信じ込んでいます。

　最後には、親切な指導を下さった先生方に、こうした貴重な大会の機会を下さった上海交通大学かつ日本科学協会にも感謝します。とてもとても多くのことを学び、大変成長させました。心より厚くお礼申し上げます。

**大連大学 李嘉嘉**（原文日本語）



今回上海交通大学で行われた2017年笹川杯全国日本知識大会に参加できたことは、この上ない喜びであり、心から感謝の意を表したいと思う。そして、大連に戻ってもう一週間になった。今も時々大会前後の様々なことを思わずに思い浮かべる。

　今年3月姚先生により、うちの学校も今回のクイズ大会に参加できるそうだったが、大変楽しみにした。そして、去年と同じ5月の半ば、うちの学院で学校内の初戦が始まった。激しい初戦を通じて、参加者3人を決めた。幸い私が再びその中の一人である。新学期から、我々3人が大会の正式準備し始め、毎日忙しくてたまらなかったのに、今から見ると楽しい間を過ごした。それから12月8日、姚先生とともに四人で上海に到着した。

　9日の午前から、いよいよ我々の戦いが始まった。不思議なのは、我々団体戦も個人戦も予選戦から毎回必ず延長戦の段階に入り、必要な試合の他、我々団体と個人の延長戦を合わせて10回以上超えた。特に、我々と四川外国語大学の皆が決勝戦の最後まで戦い、いい勝負になりまして、本当に感心した。最初の緊張、興奮、心配していたことは10回以上の延長戦とともに最後にかえって落ち着くようになった。中国には「志さえあれば必ず成功する」ということわざがあり、その通り我々3人が諦めないで粘り強く全力を尽くし、また姚先生の応援のおかげで、団体一等賞を受け取った。

　私は去年武漢で先輩と一緒に団体三等賞を受賞したのは今までありありと目に浮かぶ。その当時私が観客で決勝戦を見た時、羨ましく仕方がなく、いつか我々の学校もその決勝戦に入らればいいなあとひそかに思った。今度、私が先輩になり、先生と後輩といかにも充実した毎日を送っていたとまた実感した。日本語学習者として、日本語だけでなく一番重要なのは日本という国の歴史や地理及び文化などの総合知識を把握することだと考える。笹川杯のおかげで、全国各地の日本語学習者と交流し、個人的な視野を広げてくれた。

なお、ここでまずは指導してくれて、最後まで応援してくれた姚先生に感謝の意を表したいと思う。そして、共に戦って愉快な時間を楽しんだチームメートの二人にありがたいと思う。今度のきっかけによって、同じチームの仲間同士との絆もよりいっそう深めた。またこんなすばらしい機会をいただいた日本科学協会、主催の上海交通大学及び協力していただいた皆様に感謝した。今回の笹川杯は大学生涯最後の勝負かも知れませんが、自分もこの度に出会ったすべての物事を一生に一度だけの貴重な記憶として深く心に刻んでいく。最後に、笹川杯全国日本知識大会がますます発展しよう心からお祈りする。さらにより多くの選手に参加してもらえることを期待しておる。

**大連大学　鐘一棚**（原文中国語）



まずは、この盛大な大会に参加させてくれた主催者にとても感謝しています。得られたものはたくさんありました。

この大会に参加して、自身の知識量が不足していると認識できました。参加している間ずっと、「革命はまだ成功していない、同志はなお努力しなければならぬ」という言葉が頭に響いていました。各大学からやってきたエリート達を目にすると、自分は見劣りする感じがしました。そういう気持ちになるほど緊張してしまいます。交通大学図書館の先生が優しく微笑み温かい声をかけてくださって、かなりの緊張がすっとほぐれました。私達が緊張していると先生がやって来て、「大連大学はとても強いの、頑張って！自分を信じて！」と声をかけてくださるのです。初対面だったのに、まるで引率してくれた先生のような温もりを感じました。大会後、先生は交通大学の「貴賓門」の見学にも連れて行ってくださいました。上海の旅のとても深い思い出となっています。

来年も大会に参加します。今年の試行が先輩方のリードと幸運ですばらしい成績となり、プレッシャーが倍増しています。それでも気落ちすることなく、今年の成績を目標に、引き続き頑張ります！

**上海交通大学 王若平**（原文日本語）



この度は、笹川杯の知識コンテストに参加いただき、誠にありがとうございました。

普段の日本語の授業ですが、ほとんどはやはり、文字・文法・文学などの内容が主で、日本事情の授業はもちろんありますが、時間などの原因で、内容は限られています。その故、この度の知識大会は、非常にいい勉強の機会になり、日本についての知識を広げることができました。改めて、日本財団・日本科学協会及び他の主催者方々に、お礼を言わせていただきます。

また、こういうふうに、ステージに立って、ボタンを押したり、ホワイトボードに回答を書いたりするのが初めてなので、最初はタイミングなどが分からず、結構戸惑っていましたが、とてもおもしろくていい体験になりました。

それに、団体戦と個人戦がありますが、団体戦のほうは、チームメイトと協同で準備したり、作戦を練たりして、チームワーク力も上がりました。

うちの学校は、主催校なので、今年の春から先生方々が準備を進めてきました。３月から５月にかけて、学校内で選抜が行われて、それから本大会に向けて、色々な資料を活用した上で、準備してきました。

これからも、満足せずに、日本についての知識をもっともっと勉強したいと思います。

**上海交通大学　呉文君**（原文中国語）



あらゆる大会は、参加するたび、経験を吸収し、見聞を広めて、生活を豊かにできる貴重な機会だと思っています。今回の日本知識クイズ大会はなおさらです。

これほどたくさん優秀なチームがある中で第二位を獲得できたことは非常に光栄ですが、自身の足りないところに気づいたことも収穫だったと思います。

今年3月、日本語学科でチームメンバーの選抜が始まりました。何回もテストを受けて、この貴重な機会を手にしたのです。大会準備の初めに、指導の先生から心の込もった訓示があり、この大会には長期間の準備が必要で、普段の小さなことの積み重ねだとのことでした。それから毎月、さまざまなリソースを利用して資料を整理し、記憶を強化しました。協力を身につけ、メンバー間の呼吸が合うようになり、お互いに討論していくうち大胆に自分の考えを話せるようになりました。お互いの成果を共有して、目標に向かって邁進しました。

今回は幸運なことに最初から決勝戦に進むことができ、とても助かりました。大会の過程はとても緊張し、各大学のチームとも非常に優秀でした。ぴりぴりする早押し問題コーナーで、10点差でトップになる好機をみすみす逃したことが残念です。その後の追加問題で2問正解し、団体戦で2位になることができました。

今回の大会を通して、文学から歴史まで、地理から政治まで、映画から美食まで、幅広くたくさんの日本に関する知識を学べました。日本語のレベルもこれで向上したと思います。

改めて、この素敵な機会を下さった日本科学協会に感謝いたします。本学、上海交通大学からの支持と激励、特に王琳先生の心を尽くしたご指導と始終一貫したご配慮にも感謝しています。この充実したすばらしいひとときに付き添っていただきありがとうございました。

**上海交通大学 孫亦雲**（原文日本語）



　この度は日本へ見学をお招きいただき、誠にありがとうございます。

　団体一等賞を獲得したことを大変光栄だと存じます。われわれ参加者だけでなく、指導の先生や支えてくれた学生の皆さんのおかげだと思います。二位という結果はやはり少し残念で悔しいですが、自分の勉強不足を再認識するチャンスであり、さらに上へ挑む原動力でもあると思います。これからも日本について全般的に勉強し続けていきたいと思います。

　ご招待いただき、改めて御礼申し上げます。学部時代の最後に有意義な冬休みを過ごすよう、この機会を大切にしてたくさん学んでいきたいと思います。

**四川外国語大学 黄一倫**（原文日本語）

今回の笹川杯知識大会に参加させていただき、誠に光栄だと思います。今回は努力が実って、団体決勝戦に進出できて、うれしい限りです。この二日間を振り返ってみると、確かにいろいろ勉強になりました。各大学から集まる優秀の選手たちのおかげで、すばらしい競争を見せていただいただけでなく、日本に関する知識も広げてくださいました。そして、この試合を経て、ライバルチームとの絆もいっそう深くなりました。特に大連大学の皆さん、何度も同じ舞台に立って、競争しました。最後負けてしまったのは残念に思いますが、これもまた運命の結びつきではないかと思います。機会があれば、将来お互いにさらに理解を深めようと思います。

　また、日本に関する知識は、歴史、文学だけでなく、社会常識も含まれたため、本からの知識は足りない。中国の学生たちにリアルな日本をわかって、多角的に日本を見てほしいのは、笹川杯の精神だと、今度の知識問題を見てわかりました。笹川杯はいいプラットホームを提供してこそ、日本語専攻生の私たちが自分の能力をチェックしながら、試合を満喫できます。さらに、笹川杯のおかげで、中日両国の友好関係は固められます。したがって、このような試合をよりたくさん開催してほしいです。

　私自分も個人戦に参加しましたが、予選を突破できず、やはり勉強不足からにほかならないです。日本の経済、法律、社会問題という面に接する機会が少なくて、リアルな日本を十分わかっていないでしょう。幸い、日本に観光の機会をいただき、幸甚の至りです。この機会を利用して、日本という国をこの目で見て見たいと思います。

　今回の大会を通じで、私はたくさんの知識を身に付け、友情を築き、この有意義な二日間はもう一生も忘れられない記憶となりました。

**四川外国语大学 劉晔（原文日本語）**



  「笹川杯全国大学日本知識大会2017」が12月10日、上海交通大学にて挙行された。私は今回の知識大会を参加させていただき、とても光栄だと思います。

あれはたぶん去年の今日だ、黄さんと一緒に学部の新設立の日本知識大会チームを参加しました。あの頃、先輩たちから知識大会の経験と感受を聞いて、とても感動していました。ただ一年後、舞台に立っているの人もう私たちになりました。自ら大会に出ることになっだから、初めて知った大会を直面する緊張感である。

予選から決勝まで、私たちは７回の試合も経ってしまいました。この中て延長戦さえも４回したことがあり、実に紆余の試合だと思います。準決勝の延長戦で、私だちはミスをしだことによって、１０ポイントを減点されました。非常に不利の局面に入ってしまいました。あの時私は手の震えが止まらないほど緊張しました。幸い、次のクイズを答えられたおかげで、奈落らか生き返て、無事に決勝に入りました。試合の進行に伴って、クイズの難しさが深くなりつつあり、争いもだんだん酷くなりました。しかし、私たちは諦めることにいやと、心から叫んでしまいました。優勝を取れなかったことについて、私たちは悔しかったと思いますが、これとともに色々な勉強になりました。

この大会を通して、私たちの能力を高めるし、知識を増やし、見聞を広げるしました。先生のご指導なしには、いい成績を取れなかったでしょう。初めてから最後まで、私たち三人がお互いを励んだり、戦っだりして、私たち得るものは、試合や順位などのものだけてはなく、もっとも重要なものは、熱情が含めだ成長の旅である。また、日本科学協会によって行われだおかげで、私たちがこの舞台に立つことになりました。これに返して、更に真剣に勉強して、中日友交流活動を積極的に推進することが私たち日本語学部学生の当たり前の役割だと思います。

**四川外国語大学 李文**（原文日本語）



夢のような激しい笹川杯の旅について、私は心から無限な感謝の意を表したい。

まず、楊先生と管先生にありがとうを話したい。今度の笹川杯の旅で、先生たちは私たちに最も思いやりの助けをあげた。予選前の夜、私たちと一緒に先生たちは問題を復習してくれて、新しい問題を見つけてくれた。深夜までも働いていて、わずかな睡眠時間があって、とても疲れた。試合中、私たちの発揮が不安定のせいで、先生たちはジェットコースターに乗るのように心がずっと落ち着かなくて心配していた。本当に、ごめんね。準決勝に入ることを知るときに、私は頭を上げて、その瞬間ちょうど先生たちの目から星のような輝かしい光を放つことを見た。あの瞬間の美しさはどんな言葉でも形容しがたい。知らず知らずのうちにあの光が私たちの前進の道も明るく照らし出した。そして、チームの成員にありがとうを話したい。初めて試合の舞台に立つ時、私は足が震えて止めないほど緊張していた。そのとき、そばから「緊張しなくて、リラックスればいいよ」との声を聞こえてから、全然緊張しなくになるそのような話をいえないが、なんとなく心強くになった。そのままに、私たちは互いにはげまして、やっと決勝戦の資格を取った。一番良い結局ではないが、一緒に同じの目標を目指して、やる気満々を持つことは私の青春時代において珍しい財宝だ。最後に、主催する上海交通大学とスポンサーの日本財団にありがどうをはなしたい。あなたたちなしに素晴らしい経験がない。今度の笹川杯を通って、中日文化交流と双方の理解を深めた。私もよく勉強になった。来年訪日をきっかけに、日本の社会を一歩踏み入る理解ししてほしい。そしてそのような有意味な活動を多ければ多いほど開催することを衷心より祈っている。数年後に、今年冬のストーリーを思い出したら、きっと春の風に吹かれるのように、思わずに口元をそっと上げる。

**東華理工大学 童華軍**（原文日本語）



　　以前本でこんな物語を読んだことがある。男が洪水に囲われて神様に助けを頼んだ。そうすると間もなく小舟一隻がやってきた。乗るかと舟を漕いだ人が男に聞いた。男は神様が自分を助けに来ると思って舟に乗ろうとしなかった。そうすると舟は去って行った。洪水はまでだ溢れて続いていた。幸いヘリコプターか飛んで来た。上から縄が頭に垂れて来た。しかし今回も男はヘリコプターに乗るつもりはなっかた。すると少し経ってヘリコプターも去って行っちゃった。とうとう神様は男を助けに来なっかた。男は死んで天国に上がって神様に何故自分を助けに来なっかたと聞いた。神様はこう言い返したわしは舟とヘリコプターを駆けてあなたを救いに行ったのに何故乗らないの?

私にとっては笹川杯日本知識大会は舟とヘリコプターのようだ。しっかりと捕まえたら苦境を乗り越えることは出来る。一生懸命頑張ればきっと大会に出られる,一生懸命頑張れば決勝に出られる,一生懸命頑張ればきっとこの身で日本を体験出来ると言う信念を持って二回も参加してやっと日本に行けるようになった。

日本に行きたいなと言う気持ちは私だけじゃなくて大会に出るた皆にとっては同じだと思う。しかし日本に行けなくとも大会に出ることは有意義なことだと思う。自分の長い間積んだ知識を大会で活かして全国の日本語専門のエリートと競ったり交流したりするのは嬉しい限りだと思う。

中南財経政法大学　陳馨雷（原文日本語）



私は笹川杯に参加したことで、人生が変わりました。

私は日本語学科を専門にしています。笹川杯に参加する前に、日本語がただのツールで、日本語学科も所詮日本語という言語を学ぶところだけだと思いました。ひたすら日本語を学び、それ以上を探ることもなくて、興味もなかったんです。

しかし、すべては笹川杯という三文字が目の前に現れた時から変わりました。最初は面白半分、遊び半分の気持ちで申し込んだんですが、真剣な準備が始まった時、私のやる気や好奇心が全部引き出されたのです。日本の歴史、文化、社会、経済など様々な私の知らない知識が波のように襲ってきた。今まで小さく思った日本語がかけ橋になって、日本という近いような、遠いような国に連れてくれたのです。初めて、日本語学科でよかったと思いました。

また、試合の時、たくさんの意志投合の学生さんにであいました。みんな、ライバルであり、友でもあります。みんな同じ目標を追い、同じ世界に立っています。そのみんなを見て、ぞくぞく、そわそわの気持ちが止まられなく、一瞬結果はどうであろうと関係なくなりました。早押しクイズの時、全員反則で一斉にため息をしたのも面白かった（笑）。

笹川杯に参加して、自分自身をも、将来の目標をも見直したんです。日本語や日本という国にもっと興味を持つようになりました。その、日本語はただのツールで、やる気がない私を変えたのは笹川杯でした。感謝しています！

来年は大学院で日本語言語学に励みます。もし、またチャンスがあれば、ぜひもう一度挑戦してみます！今度はまたどんな変わりをもたらしてくれるのかな（笑）。楽しみにしています。

**天津外国語大学 周姗姗**（原文日本語）



「どうして日本語を勉強したいと思っているのですか？」と日本語を勉強し始めて以来、中国人や日本人に何回にも聞かれた。私はいつも「日本語を勉強して、マスコミだけに頼って情報を入手するのではなく、日本に行って、本当の日本を自分の目で見たり、自分の語力で日本語のニュースや文章を理解したり、文化的にも地理的にも近い国である日本の本当の様子を自分で確認し、中国人に伝えて、また自分の努力で中国、中国人の本当の様子を日本人に知ってもらいたいからです」と答えていたのだ。

今回の知識大会に参加できて本当によかったと思っている。準備している間に、以前表面的にしか見ていなかった日本の歴史や社会文化などを詳しく身につけるようになって、日本に対する認識をいっそう深めるようになった。日本に行かなかったと言っても、勉強を通して、日本により近づいたように感じがした。

初めて笹川杯日本知識大会を知ったのは2015年、学部三年生の時のことだった。友達と一緒に図書館で勉強した時、彼女が難しそうな内容を勉強していたのにちらりと見て、「何を読んでいるの」と聞いたら、知識大会に参加することを教えた。なんと難しそうな問題だろう、自分には絶対無理だなと感心した。

2016年、大学日本語専攻生八級能力試験のため、日本文化や文学など様々な日本関連の知識を身につけなければならなかったということで、試験によく出てきた内容を中心に日本概況を勉強し始めた。分からなかったことばかりではなく、半分ぐらいは四年間の勉強を通じて、すでに頭に入っていたのは嬉しいことだった。勉強すればするほど、もっと知りたくなるようになった。そのとき「笹川杯日本知識大会」はまた目の前に浮かんできた。知識大会もきっとこんな感じだろう、一度でも参加してみたいなぁと思うようになった。

今年に入り、うちの学校は全国知識大会に参加する適当な学生を選抜するため、校内で知識大会を行った。先生から「知識大会に参加しますか？」と聞かれた時、私は考えもしなくて「はい」と即答したのだ。これをきっかけに、日本に対する認識を深めようと思いながら、本やインターネットを通して、いろいろな情報を網羅して、猛勉強し始めた。その時は最終の結果はともかくとして、ただこの準備のプロセスを楽しんでいこうと思った。学校で行われた四回のテストの後、ようやく全国知識大会に参加することが決まった。

せっかくのチャンスを見逃さないように、全力でやってみようと一度決めたからには、迷わずに最後まで頑張らなきゃとチームの三人が励まし合いながら、準備を始めた。地理から文化、文学や政治、そして経済など、すべてを勉強しなければいけないので、これほどの内容を覚えられるのか、みんなは心配と不安を感じたことが一度もないとは言えなかった。今もはっきり覚えているが、仲間と一緒に頑張ってきた一つ一つの光景を。地理が一番苦手な私に、仲間は地図を描きながら、一番北の北海道から、東北地方、中部地方などを経て、そして一番南の沖縄まで、各地の県庁所在地や名産品、山川などを含めて、一緒に復習したこと、一日前覚えたばかりの作家と作品をなかなか思いだせなくて落ち込んだ仲間を「大丈夫だよ、私たちも一緒に頑張るから」と励ましたこと、先生が何日をかけてまとめた資料をみんなに配ったこと、すべては私の力になったのだ。九州で一番長い川は筑後川、市名で一番使われている動物の漢字は鹿、毎日このようなささやかな「新発見」で嬉しくなったりしていた。

上海に行く前の夜、チームの仲間三人が集まっていろいろ話し合った。知識の復習だけでなく、大会に対する自分の考えについても語った。後輩の一人が言った「どんな結果になっても、準備の間に得たものはいっぱいがあって、これは一番有意義だと思う。それにみんなと一緒に頑張ってきたことは最高な思い出になろう」ということは今も私の耳元に響いている。私たちは大会をきっかけに、いろいろな知識を身につけ、日本に対する認識を深めることは何よりかいのあることではないだろうか。

今年には116大学から500名近い学生が参加したのを聞いて、笹川杯日本知識大会の持つ影響力が大きくなったことに感心した。二日間の大会で選手たちの豊富な知識量に感服せずにはいられなくなった。大会に「日本で75歳以上の方で免許更新を希望すれば、更新手続前に認知機能検査の受けなければなりません」という内容が出てきた。日本の道路が左側通行で、交通ルールは中国と違っているのに、運転免許においては共通のところがあることに驚いた。また、名刺を渡す時のマナーについての内容も出てきた。ビジネス場合には中国でも注意すべき点が多いが、縦社会の日本ほど細かくではない。このように、中日両国が社会文化や習慣、各方面において、違いが存在するとともに、共通点もあることを身をもって改めて感じた。

今年10月、2017年Panda杯作文コンクール優秀賞に選ばれた方が中国研修旅行に来て、私の大学の所在地である天津は二つ目の訪問先でした。私は訪中団を接待したボランティアの一人として、そのうちの四人に知り合った。四人が帰国した後も、ずっと私と連絡を保ち続けてきた。普段の勉強や生活の様子を話したり、自分が考えたことを伝えたりしていたことで、お互いの国や国民に対する理解を深めることができた。今回の知識大会の前にも連絡を取り合って、励ましてくれた。大会の後、私もすぐに自分が受賞したことを報告した。向こうもすぐ「おめでとう！自分のことのように嬉しい！」と返信してくれた。この方々も私も、今回私が日本の研修旅行に行くとき、また再会できることを心から楽しみにしている。

なんか運命のような感じがした。私はこの知識大会をきっかけに、日本に対する認識を深めて、また生きている間に一度でも日本に行ってみたいという夢が叶えるようになった。また大会を新たな出発点として、私が知っていた日本を家族、友人、知り合いの人にどんどんと伝えていきたい。ありがとう、笹川杯日本知識大会。

**華東政法大学 姚子茜**（原文日本語）



このたび、笹川杯日本国情知識大会で受賞までできたのは、本当に夢にもよらなかったことだ。特に私は、ぎりぎりの受賞ともいえるので、今思い出しても感謝の気持ちでいっぱいだ。

しかし、あくまでも私一人の「勝利」ということで、ここまで一緒に頑張ってきた仲間たちのことを思うと、なんとなく寂しくなるのだ。そのため、今年の団体戦でいい成果を出せなかったことを残念でならないにもかかわらず、来年もより良い成績を取るように、引き続き参加したいと思っている。

また、次の大会、北京大学で会いましょう！今度こそチームとして日本へ行くんだと、私は願ってやまない。

**華中科学技術大学　許逸菲**（原文中国語）



今年12月9日、光栄にも華中科学技術大学の日本語学科を代表して上海交通大学での日本知識クイズ全国大会に参加することができました。

それまでに日本の歴史、地理、文学に関する書籍を大量に読んで知識を大幅に広げ、日本語の学習を促す一定の作用もありました。たとえば専門用語の暗記、古典文法の運用などです。参戦する前には、たとえ入賞すらできなくても大会の準備そのものを通じて成長したと思っていました。

上海に着いた時はすでに夜遅かったのですが、大会資料を見ていると参加するチームは116もあり、どこもとても優秀な大学で、うろたえず緊張しないなどあり得ない気持ちでした。しかも早押し問題コーナーでは7名から9名の選手が同時に競い、やはりとても激しくて運も大事です。大会前夜は先輩と部屋で遅くまで本を読み、できる限り自分の知識を増やそうとしました。

12月9日の大会当日、我がチームは最終組に入りました。先の5組の競技を見て張り詰めた神経がリラックスでき、登壇したときはベストを尽くせればよいという気持ちになっていました。幸運なことに早押しで3問に成功し、290点という成績で団体戦準決勝に進めました。昼休みなしで図書館に行って個人の筆記試験を行い、筆記試験の100問は経済、政治、文化、社会の広い範囲が取り上げられていました。初めて自分の認識が偏っていて足りないと感じましたが、自分の覚えてきたものをすべて正しく答えるよう頑張るしかありませんでした。筆記試験が終わってすぐチームメイトといっしょに団体戦準決勝に参加しましたが、もう心身共に疲れていました。準決勝のテーマは難しく、簡単なものも回答権が得られずといった感じで決勝に進出する機会は逃してしまいました。団体戦準決勝で負けたショックはとても大きく、個人戦準決勝に進めたと先生から伝えられても喜べませんでした。むしろ団体戦の悔しさと不満に浸ってしまっていました。しかし幸い先生と先輩の励ましがあって気持ちを落ち着けることができ、順調に準決勝を通過しました。

初日の大会で感じたことを簡単に言うと、くたくたです。幸いなことも、逃したことも、喜びも、悲しいこともありました。朝から晩まで、全国の日本語学科のみんなと学び戦った一日は、一生忘れられない思い出になるでしょう。

2日目の決勝は初日より緊張しました。3問で回答権を得たものの2問で間違えてしまい、延長戦に入りました。延長戦では早押しする勇気もなくしていました。幸い、結果として三等賞を獲得できました。2日間の大会で実感したのは、もちろん実力は最も重要ですが、心理状態と運もかなり大きく影響するということです。

この大会に参加させてくれた大学にはとても感謝しています。また来年日本を訪問して日本の学生と深く交流し日本文化への理解を進める機会を下さった主催者にも感謝しています。日本科学協会の大島美恵子会長が挨拶の中でおっしゃった「知識から理解へ、理解から友好へ」というフレーズがとても気に入っています。この大会を開いた主催者の目的はもう達成されていると思います。中日両国が今回の大会の中で友好交流と対話をしているのが見られ、また中国の学生が日本について深く理解し学んでいるのも感じられました。単なるクイズ大会ではなく、深遠な意義のあるものだと思います。

最後に申し上げたいのは、この大会に参加するのは大変なことで、最終的な結果が残念なこともあるでしょうが、それでも後輩の皆さんには引き続き努力して来年も参加するようおすすめしたいということです。華中科学技術大学日本語学科の学生の姿を示すためだけでなく、自分の知識を向上させて中日友好交流に貢献するために。

**吉林華橋外国語学院 肖姗夢**（原文日本語）



今回は初めて、このような全国レベルの大会に参加し、貴重な経験を得ることができました。普段、お目にかかる機会の少ない方たちとも関わることが出来て、非常に楽しく充実した時間が過ごせたと思います。

まず、大会参加に至った経緯から、お話ししたいと思います。

そもそも、私は大学では双語学院に所属しており、英語と日本語を専攻しています。二つの言語を同時に勉強する学生として、普段は語学力の向上にもっぱら力を入れるだけで、文化や文学などの知識にはあまり触れていなかったのです。

たまたま去年の10月に、日本語学科（別の学院で日本語のみの専攻）の先生から、4年生が“笹川杯”の個人戦で三等賞を取ったと聞いた時に、「すごいなぁ、全国レベルの大会で賞を取るなんて……。さすが日本語専攻の学生」と思って、羨ましくてたまりませんでした。それと同時に、「もし、チャンスがあれば……」と、そのような大会への出場を、切に願うようになりました。

そして、今年の5月になった頃のことでした。先生から日本の知識に関する大会に出てみないかと打診されました。それを聞かれたときは、不安と興奮とが入り混じった気持ちでいっぱいになりつつも、私の求めていた千載一遇の機会だと思い、ぜひとも参加したいと即答しました。恥ずかしながら、当時は大会に関する知識がなかったもので、一体、どのような問題が出てくるのだろうと思って、直ちに過去問をネットで検索してみることにしました。力試しも兼ねて、ひとつ解答してみたところ、100問のうち、わずか20問しか答えられなかったので、「私には到底無理だろう」と、非常にショックを受けました。

ですが、申し込んだ以上は、頑張って準備するしかありません。「やってみないとわからない」と自分に言い聞かせて、気持ちを切り替えて準備に取り掛かりました。大会に向けた準備が負担だとは、全く思いませんでした。むしろ文学の資料を読んだり、日本の歴史に関するドキュメンタリーを見たりしていた日々は、本当に充実していました。

ついに本番当日となり、会場で、これから戦う挑戦者たちを見た瞬間、そのただならぬ気迫に一瞬、たじろぎそうになりました。レベルの高い大会だから、それなりの猛者が出場するのは当然のことだと分かりきっていましたが、やはり、実際に目の当たりにすると、なかなか平静を保てないものでした。予選が始まるまでは、携えてきた参考書の類に目を通し、ぎりぎりまで知識を詰め込むことで、雰囲気に呑み込まれないように努めました。

いよいよ個人戦がスタートするにあたり、私はこれまでに感じたことがないほどの緊張と興奮に包まれていました。実に様々な分野から、幅広い問題が出題されました。解答に自信が持てない問題も、1つや2つではありませんでした。

それでも、持てる限りの力を全て出し切り、個人優勝賞を頂戴することになりました。自分が頑張ったことの証を手にすることができ、本当に嬉しく思います。

しかしながら、栄えある賞を頂いたこと以上に、全国各地から集った代表たちと一緒に戦えたことが何よりも光栄です。世界の広さを肌で感じたことで、私の知識欲はさらに高まることになりました。この大会を通じて、筆舌に尽くしがたいほどの経験を得ました。それは勝ち負けを超えたかけがえのないものとして、今も私の心の中に残っています。

今回の結果に驕ることなく、よりステップアップできるように、一層の努力を重ねていきたいと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった主催者の皆様、ご指導していただいた崔先生、そして、大会で共に戦った二人の仲間に、この場を借りて感謝の言葉を述べたいです。本当にありがとうございました。

**南陽理工学院　日本語専攻三年生　鐘子龍**（原文日本語）

**すべてが縁から始まる**

今朝、早く起きて二人の先輩を見送った。一人はインターンシップで天津に行って、もう一人は蘇州へ面接に行った。エレベーターのドアが閉まった瞬間、突然、一年後自分も卒業することに気づいた。大学の4年間で、いろいろな活動と競技を参加した。多くの人はこんなにたくさんのことに参加したからきっと慣れていると思っている。私は反駁したくない、ほとんどの人はそういうふうに思っているかもしれないが、私にとっては、コンテストに出るたびにその初めての新鮮感をずっと持っていた。私はあらゆるのチャンスを大切にし、コンテストに出る時間が限られているので、いろいろな経験ができるというの点では、非常に幸運だと思う。

今度、上海への旅は、悔しい気持ちや残念な思いや後ろめたく思ったことなどもあったが、たくさんのことを勉強できたことはもっと大切だと思う。悔しいのは今度の試合で負けたということだ。なぜかというと、私たちのチームにとって、今度のコンテストに備えるために身につけた知識はきっと準決勝、ひいては最終的な決勝まで入賞できるとずっと自信を持っていた。私の努力は大したことではないかもしれないが、先輩はコンテストに関する全ての知識を一生懸命に勉強した。彼女はよる遅くまで寮に戻って、毎晩三、四時間しか寝なかった。朝6時前にもう教室で頑張っていた。個人戦では、先輩はトップで全国準決勝に入選したが、最後は今朝の団体戦の予選と同じ、早押しクイズで負けた。私はトーナメントの競争システムの設定に運が必要かもしれないと思う、しかし、“私は運なんて信じないよ”と先輩が私に言った、彼女はな準備が不十分で失敗したと思っているから、私はこの点について感心した。努力は必ず報われる。しかし、先輩もきっと悔しい気持ちでいっぱいだと思う。試合終了後、ファイナルに入ることができると思っていたのにと先輩は私に言った。その時、泣き出しそうな顔をしている私を見て、先輩は大丈夫だと慰めてくれた。今度の試合は彼女にとっては、大学で出た一番大きな試合なので、予選では成績が一番で準決勝に入ったからにはもう残念だなんて思っていないと言った。ただし、郭瑜先生は皆さんはちゃんと準備したから、必ず入賞できると私たちを信じてくれて、李银先生も授業で日本知識大会に関する重要なポイントを覚えさせて、それに、私は何度も日本人教師の大橋先生ご夫婦の家へ訪ねて、日本の歴史や社会文化などたくさんのことを教えてもらった。確かに、結果は期待外れで、彼らに失望させてしまった。私も後ろめたく思っている。しかし、振り返ってみると、今度の大会を通して、私はたくさんのことを勉強した。日本財団の理事長尾形武寿先生と、日本科学協会の会長大島美恵子先生に会って、武漢理工大学の日本人先生の神田英敬と知り合いになって、四川理工大学の後輩と試合のことを話し合った...それらは縁のおかげだと思う。

7年前、初めて上海に来て、大都市に憧れていた私は満足した。 上海を出た時、私はきっといつかまたこの都市に戻ると自分に言い聞かせた。思い通り、7年後の今日、私はもう一度上海に戻ってきた。それは再び近代都市への憧れが叶ったのだ。7年ぶりの上海は、そんなに大きく変わっていないと思うのは多分、今の上海は私の理想の都市の姿からだ。